

第3回ブラッシュアップ研修開催

「自然災害・環境変化の実態と対応策を語ろう」

JF全国漁青連(平山孝文会長)は6月26日、東京・内神田のコープビルで青年漁業者のための第3回ブラッシュアップ研修を開いた。青年漁業者グループリーダーの育成・資質向上ならびに青年部間の交流を図ることを目的に、JF全国漁青連が2017年から自主開催している。

今年度のテーマは「気候変動下における漁協青年部の役割—自然災害・環境変化の実態と対応策を語ろう」。水産研究・教育機構中央水産研究所の竹村紫苑研究員が講師を務め、今や全国共通の課題である気候変動に伴う自然災害や環境変化への対応について、地元で行っている取り組みを見える化し、さらに今後の活動の可能性についてグループディスカッションを行った。

平山会長は冒頭、「全国で情報交換することで、環境変化や自然災害への対応策のヒントが見つかるかもしれない。どんどん発言して活発に意見交換しよう」と呼びかけた。

ブラッシュアップ研修の恒例となった参加者同士が交流する「アイスブレイク」竹村講師の合図で数人グループに分かれ自己紹介などを行う。数分でグループの人数が変わるため、時間配分をしながら自己紹介するなど周囲への配慮が必要となる。普段、地元でしか交流がない青年漁業者にとって、初めての人と会話する機会を作っている。



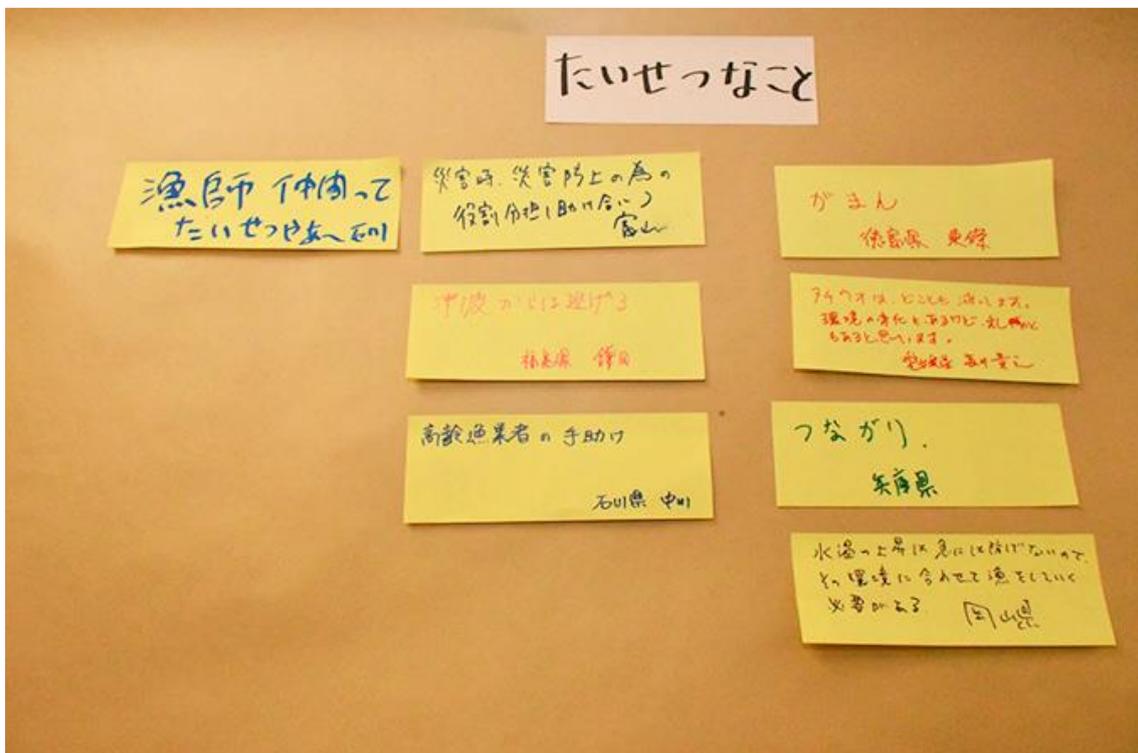
ワークショップでは日本沿岸で起きている災害や環境変化について情報共有

ワークショップでは、まず各地で起きている自然災害と環境変化の状況を5種類の色のシールで大きな日本地図に貼っていった。自然災害では「台風」「土砂災害」「津波」「地震」「その他」、環境変化は「藻場減少」「干潟減少」「サンゴ減少」「魚種の変化」「その他」。自然災害では、東北地方は東日本大震災の影響、西日本では台風や土砂災害が多く貼られており、まさに現実起こっている災害がそのまま表れていた。

一方、環境変化では「その他」がもっとも多く、それぞれの浜の事情によってばらつきが多かったものの、目立ったのは「魚種の変化」だった。北海道でブリが大量に捕れたり、兵庫県のイカナゴや静岡県のサクラエビがまったく捕れなかったりするなどの魚種の変化が如実に表されていた。

現状を全員で共有した後に、各地の対応や困っていることなどを付箋に書き出し、また日本地図に貼っていく。漁具の改善や操業時間の変更、食害生物の駆除、藻場・干潟の造成、担い手の育成など、さまざまな対応が全国各地で行われていた。対応のほか「大切なこと」についても付箋が貼られた。「漁師仲間って大切」「つながり」「高齢漁業者の手助け」といった言葉が並んでいた。

その後、8つのグループに分かれ、グループディスカッションを行い、グループの意見をまとめた発表が行われた。和気あいあいとなったディスカッションはあっという間に終了。「初めてなのでいい経験ができてよかった」「楽しかった」「テーマが広いのでもう少し絞った方がよいのでは」などの感想が多く挙げられた。



青年漁業者の「たいせつなこと」